

【資料1】米『タイム』誌、日本共産党に注目／活気にあふれ健在

アメリカのニュース週刊誌『タイム』電子版が、四〇万の党員と四三六万票（05年総選挙）を得ている日本共産党に注目し、志位和夫委員長にインタビュー、学生党員などの声も織り交ぜながら、「共産主義は日本で活気にあふれ健在」と題する記事を掲載（22日）しました。

「日本共産党はおそらく、アジアあるいは世界の中でもっとも成功している非政権党の共産党だろう」。記事は冒頭、シンガポール国立大学の藍平児研究員のこんな評価を紹介しています。

さらに「ソ連崩壊後十五年以上たつのに世界第二の経済大国で頑張り続ける共産党」「日本共産党は絶滅とはほど遠い」とのべ、過去の侵略戦争に反対した党史にもふれています。

現在の国内政治では「日本政界の大政党は明確で一貫したアイデンティティーを持っておらず、識別できるような政治的な立場の違いはほとんどない」と指摘。現在、「国会で（衆参）七二



http://www.time.com/time/world/article/0,8599,1636115,00.html

## 経済学の巨人たち

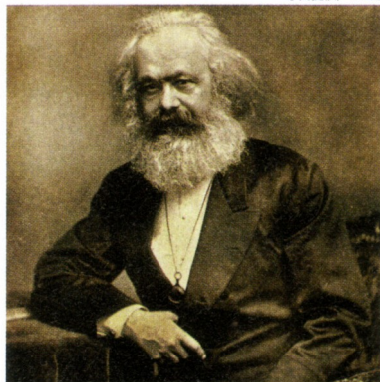
(編集部調べ)

アダム・スミス	労働が生産物が富であり、労働が価値を生み出すという「労働価値説」を唱えた。人々が勝手に利己心を追求しても「神の見えざる手」によって調整されると説き、自由競争を主張
マルサス	人口がわずかに増加するのに対し、生活物資は算術級数的にしか増加しないのが「貧困の原因」と説いた「人口論」で有名。その解消策として人口増加の抑制を主張
リカード	各国が生産費の安くつく産業を専門化し、生産費の高くつく商品は安く買える外国から輸入したほうが良いという「比較生産費説」に基づいた自由貿易を主張
メンガー	財の価値は、個人の主観的満足で決まるという「限界効用価値説」を主張。限界効用とは、たとえば空腹時のパンは最初の効用がもっとも大きく、同じパンでも2枚目以降は低下すること
ケインズ	国家が、公共投資や低金利政策によって積極的に経済に介入し、完全雇用を実現すべきと主張。古典的な経済の自由放任政策からの転換を説いた。これをケインズ革命と呼ぶ

現代の経済学は、資本主義経済を数値化して分析する近代経済学が主流。しかし、マルクス経済学が全否定されたわけではなく、近代経済学に吸収されている部分もある

## 本 そろそろ春闘の季節ですが… 高度資本主義の現代から、 『資本論』著者・マルクスへの手紙

写真提供/AFLO



カール・マルクス。1818年、ドイツ生まれ。経済学者、哲学者、革命家。資本主義は、マルクスが『資本論』で定義した。性格は喧嘩早く自信家だが、悲観的な面もあったという

「労働者は、いくら頑張っても、その働きに応じた賃金をもらえない。その労働の超過分は資本家の懐に入る」「より効率よく儲けるため、資本は集中して社会的な存在になるが、資本家の目的が儲けであることは変わらない」「資本主義の発展は、資本家が自

由に利用できる人間を作り出す」アレ？ 意外に現代に似ているような部分もありますね。成果主義の流れもあるけど、サービス残業はまだまだ当たり前前。M&Aが効率化を優先しているならリストラもやむなし。自由に利用できる人間とは、ある意味、簡単に切り捨て可能な労働者のことですね。最近の日本では、格差社会なんていわれる問題が議論されています。

(武藤平蔵)

# 拝

啓、マルクス様。貴方がこの世を去ってから、1世紀以上もの月日が流れましたが、僕たちは相変わらず資本主義社会を生きてます。貴方がご存命のころと比べて、資本家の方々も、僕たち労働者（今はサラリーマンと呼ばれる人たちが多いですが）に対してそんなに気に使ってくれないので、それほど居心地は悪くありません。

今、日本は、好景気だそうです。それを実感している人は1割もないといえます。それもそのはず。ここ5年、景気は拡大しているのに、一昨年までサラリーマンの所得は減っていて、個人に対しての税金は上がっています。やるせないですが、資本家と労働者は、妥協点を探りあいながら資本主義を存続させていくでしょう。共存共栄ってやつですね。双方とも丸くなりません。貴方は、今の世の中をどう眺めているのでしょうか。その声が聞けないのが残念です。それではまた。——敬具。

BOOK

## 【資料2】 R25がマルクスへの手紙

二議席のうちたった一八議席しかないものの、日本共産党はしばしば、日本の旧態依然たる政治への唯一の真の野党としての役割を果たしている」とのべ、「従軍慰安婦」問題での安倍首相らへの追及や金銭スキヤンダルの暴露を紹介。参院選で日本共産党は「抗議にとどまらない票を集めるかもしれない」と結んでいます。（「しんぶん赤旗」七月一日付）

### 【資料3】マルクス経済学が「一番面白い」

「『落ちこぼれでもわかるマクロ経済学の本』と『落ちこぼれでもわかるミクロ経済学の本』。そしてこれが3作目のマルクス経済学の本です。出版するのが最後になってしまいました。実はマルクス経済学編を一番最初に書きました。それは単純に、『一番面白かったから』。他人に言うとは、よく不思議がられます。

今ではマルクスを教えない大学も多いみたいです。ぼくの大学ではマルクスの授業はありませんが、マクロやミクロと比べてみると、雰囲気的にマルクス経済学を『経済学』ではなく、『歴史』と見ている部分が強いに思います。

確かにマルクス経済学を勉強しても株のデイトレードで儲けたり、来年末の円相場を予想したりすることは難しいでしょう。でもそれはマクロ経済学・ミクロ経済学も同じで、どれも経済がどのように動いているかを理解するための「ベース」にすぎません。

マルクス経済学は経済の原理、原則であるとは考えられています。なぜお金がなきゃいけないのか、なぜ商品は商品となりえるのか、資本家はどうやって利益を得ているのか、労働者の給料はどうやって決まっているのか、など。そのようなことが体系的に説明してあります。

確かに小難しい表記が多いですが、言っている事は資本主義経済、特に日本経済にはよく当てはまりますので、現実に置き換えて考えてみると意外と分かりやすいですよ。」（小暮太一『マルクス経済学の本』世界一簡単なマルクス経済学の本）マトマ商事、二〇〇七年一月、「はじめに」より）

## 一、社会主義とは何か

### 【資料4】そもそも社会主義とは

「現代の社会主義は、その内容からいえば、まず、一方ではいまの社会にゆきわたっている、有産者と無産者、資本家と賃労働者の階級対立の直観から、他方では生産のなかにゆきわたっている無政府状態の直観から生まれた産物である。」（エンゲルス『空想から科学へ』一八八〇年、古典選書シリーズ、新日本出版社、二三ページ）

### 【資料5】代表的な空想的社会主義者

○サン・シモン（一七六〇〜一八二五年）

フランスの空想的社会主義者。貴族出身で、軍人としてアメリカ独立戦争に参加。フランス革命のさい、国有地売却の投機でもうけ、その富をもとに理想社会の研究をおこなった。主著『産業者の教理問答』（一八二三〜二四年）

○シャルル・フーリエ（一七七二〜一八三七年）

フランスの空想的社会主義者。商人の出身。主著『四運動および一般運命の理論』（一八〇八年）、『産業的・組合的新世界』（一八二九年）など。

○ロバート・オウエン（一七七二〜一八五八年）

イギリスの空想的社会主義者。一八〇〇年、スコットランドのニュー・ラナークの紡績工場の経営者になり、労働時間の短縮や労働者の環境改善に取り組む。その後、共産主義にすすみ、一八二五年、アメリカ・インディアナ州に二万エーカーの土地をかって共産主義村をつくったが失敗。「幼稚園の発案者」（エンゲルス）、協同組合の生みの親。一八三四年には、イギリスの「全国労働組合大連合」の結成にもかかわる。主著『新社会観』（一八一二〜一三三年）、『ラナーク州報告』（一八二〇年）、『新道德世界の書』（一八三六〜四四年）など。

【資料6】空想的社会主義はなぜ乗り越えられる必要があったのか

「資本主義的生産の未成熟な状態、未成熟な階級の状態には、未成熟な理論が照応していた。未発達な経済的関係のなかにまだかくされてきた社会的課題の解決は、頭の中から作り出さなければならなかった。……必要なことは、社会制度の新しい、いっそう完全な体系を考案し、これを宣伝により、可能な場合には模範的実験の実例によって、外から社会におしつけることであつた。これらの新しい社会体系は、はじめから空想になるように運命づけられていた。」（エンゲルス『空想から科学へ』、三二〇〜三三三ページ）

「社会主義を科学にするためには、まずそれが実在的な基盤の上にすえられなければならないかつた。」（同前、四六ページ）

「従来の社会主義はたしかに既存の資本主義的生産様式とその結果を批判したが、しかしそれを説明することはできなかつたし、したがってそれを克服することもできなかつた。従来の社会主義はそれを簡単に悪いものとして投げ捨てることができただけである。」（同前、六〇ページ）

「すべての社会的変動と政治的変革の究極の原因は、人間の頭のなかに、すなわち、永遠の真理と正義についての人間の認識の発展に求めるべきでなくて、生産様式と交換様式の変化に求めるべきであり、それは哲学のなかでなくて、その時期の経済のなかに求めるべきである。……あばき出された弊害を取り除くための手段もまた、変化した生産関係そのもののなかに——多かれ少なかれ発展して——存在しているにちがいない……。この手段は、けつして頭のなかで考案すべきものではなくて、頭をつかつて現在の生産の物質的事実のなかに発見すべきものである。」（同前、六二ページ）

## 二、マルクス、エンゲルスの「科学の目」

【年表1】マルクスの歩みから

一八三六年 ベルリン大学法学部に入学。ヘーゲルの哲学を研究し、「青年ヘーゲル派」の一員となる。

一八四二年 大学卒業後、ライン州の急進ブルジョアジーが創刊した「ライン新聞」の寄稿者に。

一〇月からは編集長として、革命的民主主義の立場から反動的なプロイセン政府批判を展開。

一八四三年 三月、「ライン新聞」編集部を去り、パリに移住。

一八四四年 『独仏年誌』を創刊。マルクス「ユダヤ人問題によせて」「ヘーゲル法哲学批判序説」、エンゲルス「国民経済学批判大綱」を掲載。このなかで、観念論から唯物論へ、革命的民主主義から共産主義の立場に前進。

八月、エンゲルスがマルクスを訪問。二人の理論上の一致を確認し、共同が始まる。

一八四五年 共同して『聖家族』を刊行、「青年ヘーゲル派」のバウアーを批判。

エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』刊行。

「ドイツ・イデオロギー」の共同執筆を開始（一八四六年七月ごろ）。

一八四六年 ブリュッセルで共産主義通信委員会をつくる。

一八四七年 マルクス、エンゲルス、「正義者同盟」に加盟。六月、「正義者同盟」は「共産主義者同盟」と改称（第一回大会）。一二月、第二回大会、綱領の起草をマルクス、エンゲルスに委ねる。

一八四八年 二月、『共産党宣言』刊行

○ヘーゲル（一七七〇～一八三一年）

ドイツ古典哲学を代表する哲学者。一八一八年からベルリン大学の哲学教授になり、一八二九～三〇年には同総長。ヘーゲルの哲学体系は当時のプロイセン王国の「国定哲学」といわれるほどの地位を占めた。

ヘーゲルによれば、世界は「精神」のあらわれであり、精神そのものである。彼は、この精神を「絶対理念」と呼び、永遠の昔から世界のどこかに存在する「絶対理念」が自己展開してゆくと考えた。すなわち、「絶対理念」はまず、純粋な「存在」（ただあるということ）から出発して、「絶対理念」に到達する。そこでこんどは、みずからを外化して自然となり、自然のなかから生命が生まれ、人間があらわれ、人間の精神の発展において、ふたたび「絶対理念」に復帰する。このような「絶対理念」の自己展開が世界であり、ヘーゲルの哲学体系そのものにほかならない、とした。

○「青年ヘーゲル派」

ヘーゲルの死後、ヘーゲル学派のなかで、弁証法的方法を主要なものとし、宗教批判を展開したグループ。「ヘーゲル左派」ともいう。宗教批判は実質的には当時の封建体制への批判を意味し、マルクス、エンゲルスも一時このグループに属した。その後、プロイセン王国の反動支配が強化されるなかで、フオイエルバッハ（『キリスト教の本質』一八四一年）のように唯物論の立場にすすむ人物も現われたが、多くは観念論的批判に終始した。のちにマルクス、エンゲルスは、観念論的な批判に終始する立場を「ドイツ・イデオロギー」として批判した。

【表1】唯物論か観念論か

唯物論	観念論
<ul style="list-style-type: none"><li>・自然や物質が本源的なものである。人間の感覚や意識は、物質である脳・神経の働きである。</li><li>・自然も社会も、客観的に実在する。</li><li>・「自分」を含む人間は、そうした自然や社会の一部である。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・人間の精神や意識が本源的なものである。</li><li>・「世界」は、人間の意識や精神によって成り立っている。</li><li>・人間の意識から独立した客観的存在などというものは実在しない。</li></ul>

### 【資料7】哲学の根本問題

「すべての哲学の、とくに近代の哲学の、大きな根本問題は、思考と存在との関係にかんする問題である。……

……存在にたいする思考の、自然にたいする精神の関係という問題、すなわち哲学全体の最高の問題……存在にたいする思考の地位に関する問題は、中世のスコラ学においてもやはり大きな役割を演じており、本源的なものはないか、精神かそれとも自然かという問題、この問題は、教会との関係でいうと、神が世界を創造したのか、それとも世界は永遠の昔から存在しているのか、というふうに先鋭化された。

この問題に答える立場にしたがって、哲学者たちは二つの大きな陣営に分かれた。自然にたいして精神の本性を主張し、したがって結局のところ、なんらかの仕方の世界創造をみとめた人

びとは……観念論の陣営を形づくった。自然を本源的なものとみた他の人びとは、唯物論の種々の学派に属する。

観念論と唯物論という二つの言いあらわしは、本来、これ以外の意味をもっておらず、この本でもこれら二つは、これ以外の意味にはつかわれていない。これら二つにこれ以外の意味をもち込むと、どんな混乱が生じてくるかは、以下にみられるであろう。」(エンゲルス『フオイエルバッハ論』一八八八年、古典選書シリーズ、新日本出版社、三〇〜三三ページ)

【表2】弁証法的なものの方の特徴

弁証法的な見方	形而上学的な見方
<ul style="list-style-type: none"><li>・ものごとを世界の全般的な連関のなかでとらえる。</li><li>・すべてを生成と消滅、運動と変化のなかでとらえる。</li><li>・固定的な境界や「不動の対立」にとらわれない。反対物への転化も視野にいれる。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・ものごとを、個々ばらばらにとらえる。</li><li>・固定した、いちど与えられたらそれきり変わらないものとしてとらえる。</li><li>・ものごとを、「白は白、黒は黒」という絶対的な対立のなかでとらえる。</li></ul>

(不破哲三『科学的社会主義を学ぶ』新日本出版社、四六ページ)

### 【資料8】マルクスの弁証法的方法

「私の弁証法的方法は、ヘーゲルのそれとは根本的に異なっているばかりでなく、それとは正反対のものである。ヘーゲルにとっては、彼が理念という名のもとに一つの自立的な主体に転化しさえした、思考過程が、現実的なものの創造者であって、現実的なものはただその外的現象をなすにすぎない。私にあつては反対に、観念的なものは、人間の頭脳のなかで置き換えられ、翻訳された物質的なものにほかならない。

……弁証法がヘーゲルの手のなかでこうむっている神秘化は、彼が弁証法の一般的な運動諸法則をはじめて包括的で意識的な仕方て叙述したということ、決してさまたげるものではない。弁証法はヘーゲルにあつてはさか立ちしている。神秘的な外皮のなかに合理的な核心を発見するためには、それをひっくり返さなければならぬ。

その神秘化された形態で、弁証法はドイツの流行となった。というのは、それが現存するものを神々しいものにするように見えたからである。その合理的な姿態では、弁証法は、ブルジョアジーやその空論的代弁者にとっては、忌まわしいものであり、恐ろしいものである。なぜなら、この弁証法は、現存するものの肯定的理解のうちに、同時にまた、その否定、その必然的没落の理解を含み、どの生成した形態をも運動の流れのなかで、したがってまたその経過的な側面からとらえ、なにものによつても威圧されることなく、その本質上批判的であり革命的であるからである。」(マルクス「第二版へのあと書き」、『資本論』新日本出版社、新書版①二八〜二九ページ)

【資料9】史的唯物論の「定式」(マルクス『経済学批判』序言)

「私の研究にとって導きの糸として役立つた一般的結論は、簡単に次のように定式化することができる。

(イ) 人間は、彼らの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸関係にはいり込む。すなわち、彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係にはいり込む。これらの生産諸関係の総体は、社会の経済的構造を形成する。これが現実の土台であり、その上に一つの法的かつ政治的な上部構造がそびえ立ち、その土台に一定の社会的諸意識形態が対応する。物質的生活の生産様式が、社会的、政治的および精神的生活過程全般を制約する。人間の意識がその存在を規定するのではなく、逆に、人間の社会的存在がその意識を規定する。

(ロ) 社会の物質的生産諸力は、その発展のある段階で、それまでそれらがその内部で運動してきた既存の生産諸関係と、あるいはその法律的表现にすぎない所有諸関係と、矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展の諸形態からその桎梏(しっこく)に一変する。そのときに社会革命の時期が始まる。経済的基礎が変化するにつれて、巨大な上部構造の全体が、徐々にせよ急速にせよ、くつがえる。このような諸変革を考察するにあたっては、経済的な生産諸条件に起きた自然科学的に正確に確認できる物質的な変革と、人間がこの衝突を意識するようになりこれとたかたかして決着をつける場となる、法律、政治、宗教、芸術、または哲学の諸形態、簡単に言えばイデオロギー諸形態とを、つねに区別しなければならぬ。ある個人がなんであるかを判断する場合に、その個人が自分をうぬぼれ描く評価には頼れないのと同様に、このような変革の時期を、その時期の意識をもとに判断することはできないのであって、むしろこの意識を、物質的生活の諸矛盾から、すなわち社会的生産諸力と生産諸関係とのあいだに存在する衝突から、説明しなければならない。

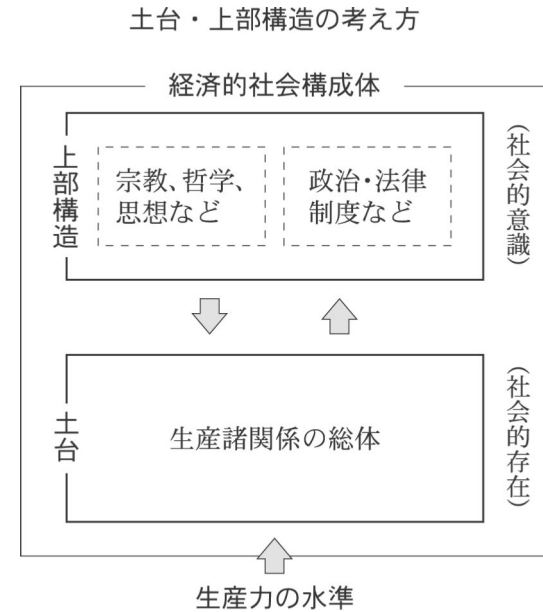
(ハ) 一つの社会構成体は、すべての生産諸力がそのなかではもう発展の余地がないほどに発展しきらないうちは、けっして没落することはなく、また、新しいさらに高度の生産諸関係は、その物質的な存在諸条件が古い社会自体の胎内で孵化しきらないうちは、けっして古いものに取って代わることはない。それだから、人間はつねに、みずから解決できる課題だけをみずから提起する。というのは、やや立ち入って考察してみるとつねにわかることだが、課題そのものが生まれるのは、その解決の物質的諸条件がすでに存在しているか、または少なくともそれらが生じつつあることが把握される場合だけだからである。

(ニ) 大づかみに言って、アジア的、古代的、封建的および近代ブルジョアの生産様式が、経済的社会構成体の進歩していく諸時期として特徴づけられよう。ブルジョアの生産諸関係は、社会的生産過程の最後の敵対的形態である。敵対的というのは、個人的敵対という意味ではなく、諸個人の社会的生活諸条件から生じてくる敵対という意味である。しかしブルジョア社会の胎内で発展しつつある生産諸力は、同時にこの敵対を解決するための物質的諸条件をもつくりだす。それゆえ。この社会構成体をもって人間社会の前史は、終わりを告げる。」

(マルクス「『経済学批判』序言」一八五九年、古典選書シリーズ『「経済学批判」への序言・序説』新日本出版社、一四一―一六ページ。(イ) (ニ) の区切りと改行は引用者による)

原始共産制	人類社会の最初の段階。人びとは共同体（氏族）の一員として生活。生産手段は共同体全体のもの（共有）。生産力が低いため、みんなで働き、生産物もみんなで分けた（搾取は存在しない）。	無階級社会
奴隷制	奴隷主が、働き手（奴隷）も生産手段も所有し、奴隷を働かせて搾取。奴隷は「ものを言う道具」として奴隷主に人格的にも従属させられた。	階級社会
封建制	最大の働き手である農民は、農具などは自分で所有するが、主要な生産手段である土地は封建領主のもの。農民は、身分制度によって土地に縛り付けられ、封建領主の農園で働かされる（労働地代）か、年貢（現物地代）をとられる	
資本主義	主要な生産手段である工場や機械は、資本家が所有。生産手段をもたない労働者は、自分の労働力を売って、賃金を得て生活せざるをえない。資本家は、賃金を支払って雇った労働者を工場で働かせ、剰余価値を手に入れる。	

【表3】人類社会のこれまでの四つの発展段階



【図1】経済的社会構成体——土台と上部構造



【資料10】これまでの歴史は階級闘争の歴史である

「新しい諸事実は、これまでの歴史全体を新しく研究するようにせまったが、その結果つぎのことがあきらまかになった。これまでのすべての歴史は、原始状態を例外として、階級闘争の歴史であったこと、これらのたがい闘争する社会の諸階級は、いつでもその時代の生産関係と交易関係、一口でいえば、経済的諸関係の産物であること、だから社会のそのときどきの経済的構造が現実の土台をかたちづくっており、それぞれの歴史の時代の法律のおよび政治的諸制度ならびに宗教的、哲学的、その他の見解からなる全体の上層構造は、結局、この土台から説明されるべきであるということである。ヘーゲルは歴史観を形而上学から解放し、それを弁証法的にした――しかし彼の歴史観は本質的に観念論的であった。いまや観念論はその最後の隠れ場所から、歴史観から追い出され、唯物論的歴史観があたりえられ、これまでのように人間の存在をその意識から説明するのではなくて、人間の意識をその存在から説明する道が見いだされたのである。」（エングルス『空想から科学へ』五九ページ）

【資料11】史的唯物論のそもそも論的提起

「われわれは、無前提なドイツ人のところでは、すべての人間的存在の、したがってまたすべての歴史の第一の前提、すなわち、人間たちは『歴史をつくる』ことができるためには生きることでなければならないという前提を確認することからはじめなければならない。しかし、生きるために必要なのは、とりわけ、飲食、住居、衣服、そしてさらにその他のいくつものものである。したがって、第一の歴史的行為は、これらの欲求を充足するための諸手段の産出、物質的生活そのものの生産であり、しかも、これは、人間を生かしておくだけのためにも、数千年前と同様に今日もお日々刻々はたされなければならない歴史的行為、すべての歴史の根本条件である。」（マルクス、エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』一八四五～四六年、古典選書シリーズ『新版 ドイツ・イデオロギー』新日本出版社、三五ページ）

「人間史の第一の前提は、もちろん生きた人間的諸個人の存在である。したがって、確認されるべき第一の事実は、これらの個人の身体的組織およびそれによってあたえられるその他の自然にたいする彼らの関係である。……すべての歴史記述は、これらの自然的基礎、および歴史の経過における人間の行動によるそれらの変形から出発しなければならない。

……人間自身は、彼らがその生活手段を生産——彼らの身体的組織によって条件づけられている措置——しはじめるやいなや、みずから動物から区別しはじめる。人間は彼らの生活手段を生産することによって、間接的に彼らの物質的生活そのものを生産する。人間が彼らの生活手段を生産する様式は、さしあたりは、眼前に見いだされる、また再生産されるべき生活手段そのものの特性に依存する。この生産の様式は、これが諸個人の肉体的存在の再生産であるという側面からだけ考察されるべきではない。それはむしろ、すでにこれらの個人の活動のある特定の方法、彼らの生命を表現するある特定のの方法、彼らのある特定の生活様式なのである。諸個人が彼らの生命を表現するとおりに、彼らは存在しているのである。したがって、彼らがなんであるかは、彼らの生産と、すなわち、彼らがなにを生産するか、また、彼らがいかに生産するかと一致する。したがって諸個人がなんであるかは、彼らの生産の物質的諸条件に依存する。」（同前、一七～一八ページ）

【資料12】搾取の形態が社会の発展段階を区別する

「この剰余労働が、直接的生産者すなわち労働者からしぼり取られる形態だけが、もろもろの経済的社会構成体を区別するのであり、たとえば奴隷制の社会を賃労働の社会から区別するので

ある。」(マルクス『資本論』新書版②三六八ページ、上製版I a三六九ページ)

「生産の社会的形態がどうであろうと、労働者と生産手段とはつねに生産の要因である。しかし、一方も他方も、互いに分離された状態では、ただ可能性から見て生産の要因であるにすぎない。およそ生産が行なわれるためには、それらが結合されなければならない。この結合がなしとげられる特殊な仕方によって、社会構造のさまざまな経済的諸時代が区別される。」(『資本論』新書版⑤六二ページ、上製版II六四ページ)

#### 四、資本主義経済の仕組み

##### 【資料13】労働とは——人間と自然の物質代謝

「労働は、まず第一に、人間と自然とのあいだの一過程、すなわち人間が自然とその物質代謝を彼自身の行為によって媒介し、規制し、管理する一過程である。人間は自然素材そのもの一つの自然力として相対する。彼は、自然素材を自分自身の生活のために使用しうる形態で取得するために、自分の肉体に属している自然諸力、腕や足、頭や手を運動させる。人間は、この運動によって、自分の外部の自然に働きかけて、それを変化させることにより、同時に自分自身の自然を変化させる。彼は、自分自身の自然のうちに眠っている潜勢諸力を発展させ、その諸力の働きを自分自身の統御に服させる。」(『資本論』新書版②三〇四ページ、上製版I a三〇四ページ)

##### 【資料14】労働力の価値とは

「労働力の価値は、他のどの商品の価値とも同じく、この独特な物品の生産に、したがってまた再生産に必要な労働時間によって規定されている。……労働力は、生きた個人の素質として実存するのみである。したがって、労働力の生産はこの生きた個人の生存を前提する。この個人の生存が与えられていれば、労働力の生産とは、この個人自身の再生産または維持のことである。自分を維持するために、生きた個人は、一定量の生活諸手段を必要とする。したがって、労働力の生産に必要な労働時間は、この生活諸手段の生産に必要な労働時間に帰着する。すなわち、労働力の価値は、労働力の所有者の維持に必要な生活諸手段の価値である。……労働力の所有者は、きよこの労働を終えたならば、あすもまた、力と健康との同じ条件のもとで同じ過程を繰り返すことができなければならない。したがって、生活諸手段の総量は、労働する個人を労働する個人として、その正常な生活状態で維持するのに足りるものでなければならない。食物、衣服、暖房、住居などのような自然的欲求そのものは、一国の気候その他の自然の独自性に応じて異なる。他面では、いわゆる必需欲求の範囲は、その充足の仕方と同様に、それ自身ひとつの歴史的産物であり、それゆえ、多くは一国の文化段階に依存するものであり、とりわけまた、本質的には、自由な労働者の階級がどのような条件のもとで、それゆえどのような慣習と生活欲求をもって形成されたか、に依存する。したがって、労働力の価値規定は、他の商品の場合とは対照的に、歴史のかつ社会慣行的「モラーリッシュ」な一要素を含んでいる。とはいえ、一定の国、一定の時代については、必要生活諸手段の平均範囲は与えられている。」(『資本論』第一部 第四章「貨幣の資本への転化」、新書版②、上製版I a二九一〜二九二ページ)

「労働力の所有者は死をまぬがれない。……したがって、労働力の生産に必要な生活手段の総額は、補充人員すなわち労働者の子どもたちの生活諸手段を含むのであり、こうしてこの独自の商品所有者の“種族”が商品市場で自己を永久化するのである」(同前、二九三ページ)

「一般的な人間的な本性を、それが特定の労働部門における技能と熟練とに到達し、発達した独特な労働力になるように変化させるためには、特定の養成または教育が必要であり、それにはまたそれで、ほんのわずかでしかないとはいえ、労働力の生産のために支出される価値の枠のなかにはいつていく。」(同前、二九四ページ)

「労働力の価値は、ある一定額の生活諸手段の価値に帰着する。それゆえ、労働力の価値はまた、この生活諸手段の価値、すなわちこの生活諸手段の生産に必要な労働時間の大きさとともに変化する。」(同前、二九四ページ)

「労働力の価値の最後の限界または最低限界をなすものは、日々その供給を受けなければ労働力の担い手である人間がその生活過程を更新しえないようなある商品総量の価値、すなわち、肉体的に必要な不可欠な生活諸手段の価値である。もし労働力の価格がこの最低限にまで下がるならば、それは労働力の価値以下への低下である。というのは、その場合には労働力は、ただ萎縮した形態でしか維持され發揮されないからである。」(同前、二九五ページ)

### 【資料15】搾取の仕組み

「いま、一人の労働者の毎日の生活必需品の平均量を生産するために、六時間の平均労働が必要であると仮定しよう。さらに、六時間の平均労働は、これまた、三シリングにひとしい金の分量に実現されているものと仮定しよう。そうすると、三シリングが、その人の労働力の価格、つまり労働力の一日の価値の貨幣による表現となるだろう。もし彼が毎日六時間働くとするれば、彼は、自分の日々の生活必需品の平均量を買うのに十分な、すなわち自身を労働者として維持するのに十分な価値を、毎日生産することになる。」

だが、この人は賃金労働者なのである。だから彼は、自分の労働力を資本家に売らなければならぬ。もし彼がそれを一日三シリング……で売るならば、彼はそれをその価値どおりに売ることになる。彼を紡績工だと仮定してみよう。もし彼が毎日六時間働くならば、彼は毎日三シリングの価値を綿花につけくわえるであろう。彼が毎日つけくわえるこの価値は、彼が毎日うけとる賃金、つまり彼の労働力の価格と正確にひとしい価値のものである。しかし、このばあいには、なんらの剰余価値または剰余生産物も資本化の手に入らないことになる。そうすると、ここでわれわれは困難にぶつかる。

資本家は、労働者の労働力を買い、その価値を支払うことによって、ほかのどんな買手とも同じように、買い入れた商品を消費しまたは使用する権利を得たわけである。職は、機械を動かすことによってそれを消費または使用すると同じように、人間を働かせることによってその労働力を消費または使用する。だから資本家は、労働者の労働力の日……の価値を支払うことによって、その労働力を、まる一日……使用しまたは働かせる権利をえたことになる。……

さし当たっては、諸君の注意を決定的な一点にむけてほしい。

労働力の価値は、それを維持または再生産するのに必要な労働量によって決定されるが、しかしその労働力の使用は、ただ、労働者の活動的なエネルギーと体力とによって制限されるだけである。労働力の日分……の価値が、労働力の日分……の行使とはまったく別であるということとは、一匹の馬が必要とする飼料とその馬が騎手を乗せてゆける時間とがまったく別であるのと同じことである。労働者の労働力の価値に限界をあたえる労働量は、彼の労働力が遂行できる労働量の限界をなすものではけつしてない。先の紡績工の例をとってみよう。すでにのべたように、彼の労働力を毎日再生産するには、三シリングの価値を毎日再生産しなければならず、彼は毎日六時間働くことによってそうするのである。しかしこのことは、彼が毎日一〇時間または一二時間、あるいはそれより多くの時間働くことを妨げるものではない。ところが資本家は、紡績工の

労働力の一日分……の価値を支払うことによって、紡績工の労働力をまる一日……使用する権利を得たのである。だから彼は、紡績工を、たとえば一日一二時間働かせるだろう。だから紡績工は、彼の賃金、つまり彼の労働力の価値を補填するのに必要な六時間を超過して、もう六時間働かなければならないことになる。私は、この「あとの」六時間を剰余労働時間と名づけることになる。そしてこの剰余労働が体现されたものが、剰余価値であり剰余生産物である。もしわが紡績工が、たとえば一日六時間の労働によって、綿花に三シリングの価値、すなわち彼の賃金とちやうど等しい価値をつけくわえたとすれば、彼は、一二時間では六シリングの値打ちを綿花につけくわえ、それに比例する剰余の糸を生産することになるであろう。彼は、自分の労働力を資本家に売ってしまったのだから、彼が作り出す生産物の価値はすべて、彼の労働力の一時的な所有者である資本家のものになる。したがって資本家は、三シリングを前貸しして六シリングの価値を實現するであろう。……これと同じ過程を毎日くりかえすことによって、資本家は、毎日三シリングを前貸しして、毎日六シリングをふところに入れる。そしてこの六シリングのうち半分はふたたび賃金を支払うためにでてゆくが、残りの半分は、資本化がそれにたいしていかなる対価をも支払わない剰余価値を形成する。資本と労働のこの種の交換こそ、資本主義的生産または賃金制度の基礎であり、かつそれは、労働者を労働者として、また資本家を資本家として再生産するという結果をたえずひきおこさざるをえないものである。

剰余価値の率は、ほかのすべての事情が同じだとすれば、労働日のうち労働力の価値を再生産するのに必要な部分と、資本家のためにさらに遂行される剰余時間または剰余労働の比率によってきまるであろう。したがってそれは、労働者がそれだけ働いたのではたんに彼の労働力の価値を再生産する、もしくは彼の賃金を補填するにすぎないような程度をこえて、労働日が延長される比率によってきまるだろう。」（マルクス「賃金、価格および利潤」一八六五年、古典選書シリーズ『賃労働と資本／賃金、価格および利潤』新日本出版社、一四五〜一四九ページ）

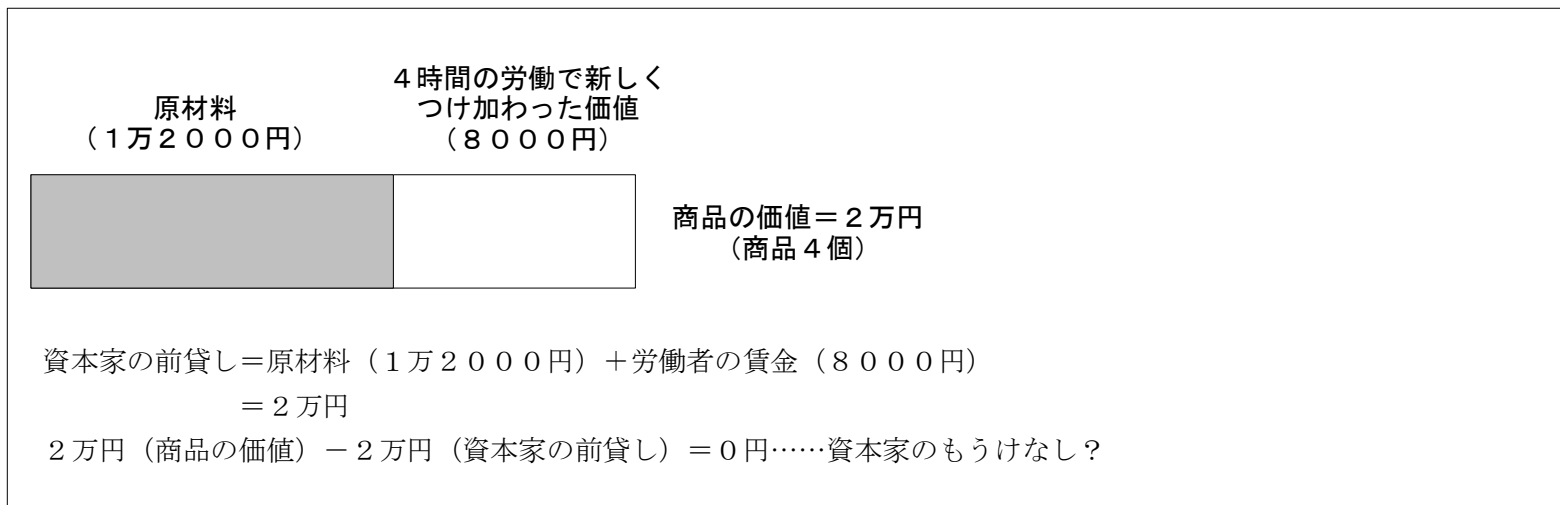
【図2】 搾取の仕組み

前提 ①労働時間1時間あたりに新しく生み出される価値 ②20000円

②労働者の1日あたり必要な生活手段 ④4時間労働分の価値

※この場合、労働者の1日の賃金は20000円×4時間=80000円になる。

【4時間労働だと……】



【労働時間を8時間に延長すると……】

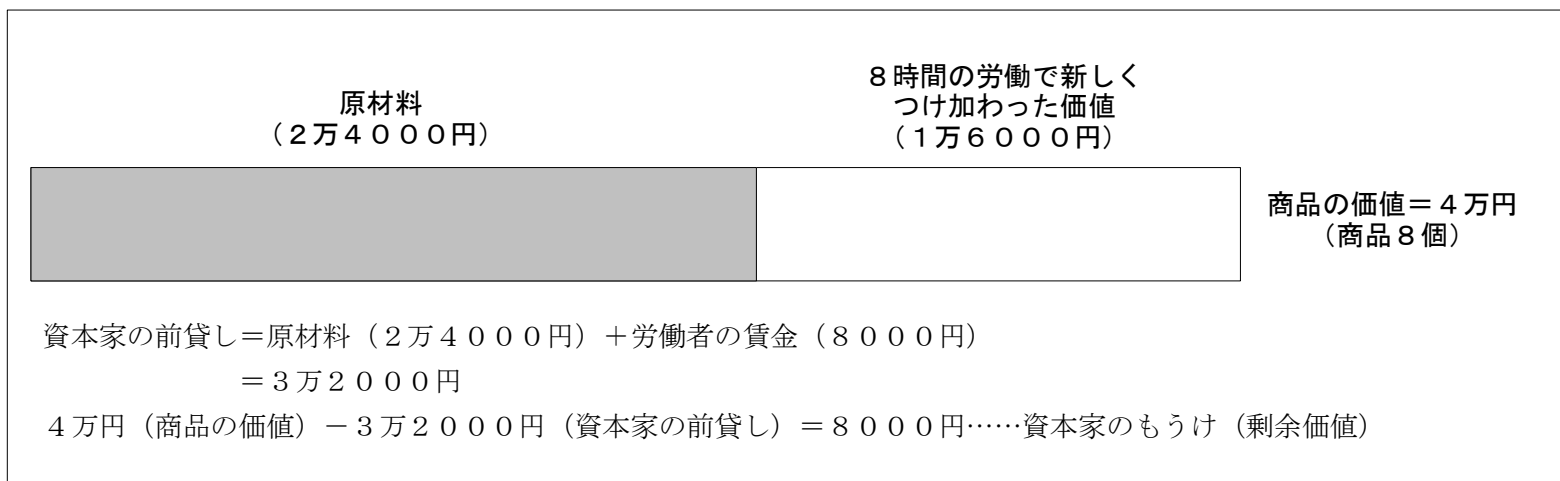
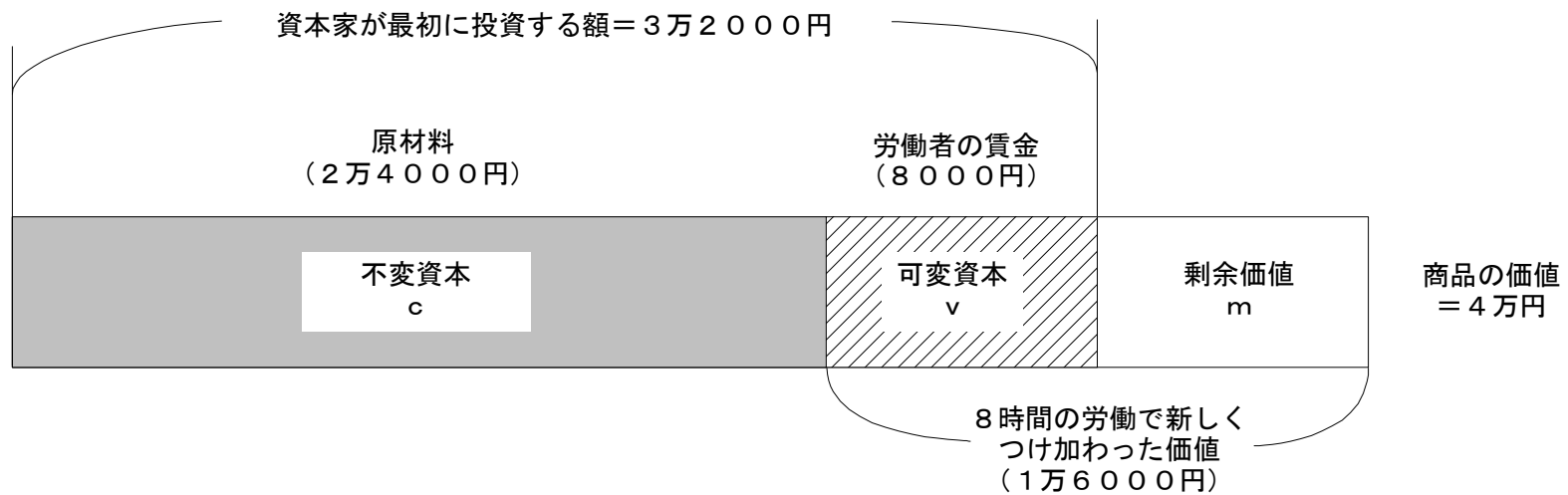


図3 不変資本、可変資本、剰余価値



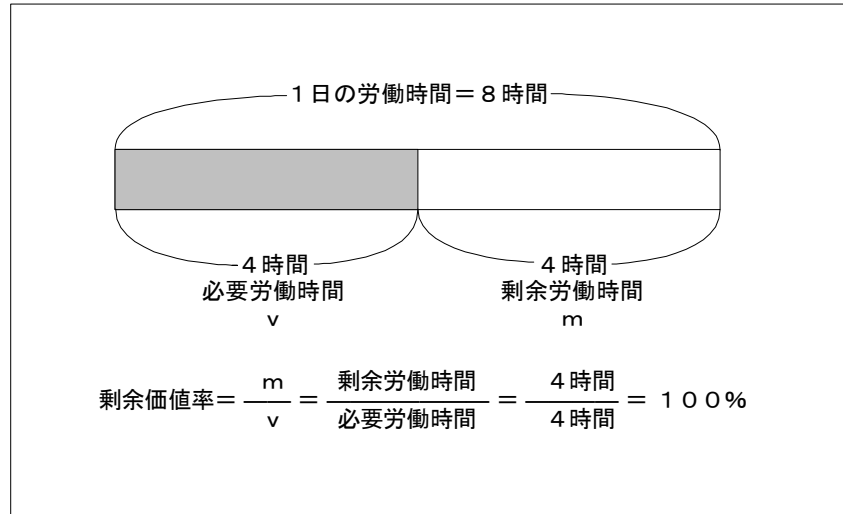
原材料の価値はそのまま商品に移転する = 不変資本 (c)  
 資本家が労働者を雇うために賃金として支払った部分 = 可変資本 (v)  
 生産過程で可変資本部分を超えて新しくつけ加えられた価値 = 剰余価値 (m)

図4 剰余価値率と利潤率

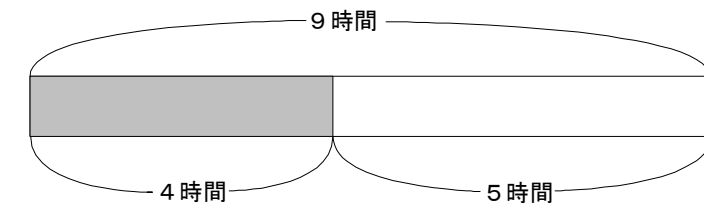
$$\text{剰余価値率} = \frac{\text{剰余価値}}{\text{可変資本}} = \frac{m}{v} \times 100\%$$

$$\text{利潤率} = \frac{\text{剰余価値}}{\text{不変資本} + \text{可変資本}} = \frac{m}{c + v} \times 100\%$$

図5 搾取を強める方法

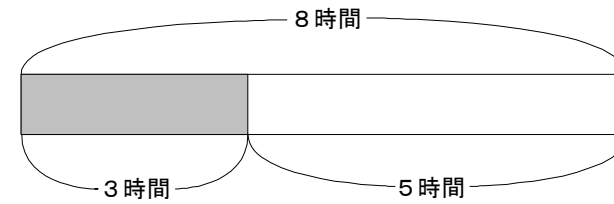


(a) 労働時間を延長する



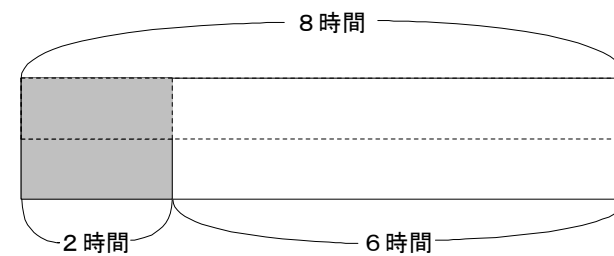
$$\text{剰余価値率} = \frac{5\text{時間}}{4\text{時間}} = 125\%$$

(b) 必要労働時間を短縮する



$$\text{剰余価値率} = \frac{5\text{時間}}{3\text{時間}} = 166.7\%$$

(c) 労働密度を上げる (労働強化)



$$\text{剰余価値率} = \frac{6\text{時間}}{2\text{時間}} = 300\%$$

### 【資料16】資本主義の推進的動機・規定的目的

「資本家としては、彼はただ人格化された資本にすぎない。彼の魂は資本の魂である。ところが、資本は唯一の生活本能を、すなわち自己を増殖し、剰余価値を創造し、その不変部分である生産諸手段で、できる限り大きな量の剰余労働を吸収しようとする本能を、もっている。資本とは、生きた労働を吸収することによってのみ吸血鬼のように活気づき、しかもそれをより多く吸収すればするほどますます活気づく、死んだ労働である。」（『資本論』新書版②三九五ページ、上製版I a三九六ページ）

「第一に、資本主義的生産過程を推進する動機とそれを規定する目的とは、できるだけ大きな資本の自己増殖、すなわち剰余価値のできるだけ大きな生産、したがって資本家による労働力のできるだけ大きな搾取である。」（『資本論』新書版③五七六ページ、上製版I b五七四ページ）

### 【資料17】「生産のための生産」にかり立てる

「資本家は、人格化された資本である限りにおいてのみ、一つの歴史的価値をもち、また、…歴史的な存在権をもつ。その限りでのみ、彼自身の過渡的な必然性が、資本主義的生産様式の過渡的な必然性のうちに含まれる。しかし、その限りではまた、使用価値と享受ではなく、交換価値とその増殖とが、彼の推進的動機である。価値増殖の狂信者として、彼は容赦なく人類を強制して、生産のために生産させ、それゆえ社会的生産諸力を発展させ、そしてまた、各個人の完全で自由な発展を基本原理とするより高度な社会形態の唯一の現実的土台となりうる物質的生産諸条件を創造させる。…資本主義的生産の発展は、一つの産業的企業に投下される資本が絶えず増大することを必然化し、そして競争は個々の資本家にたいして、資本主義的生産様式の内在的諸法則を外的な強制法則として押しつける。競争は資本家を強制して、彼の資本を維持するためには絶えず資本を拡大させるのであるが、彼は累進的蓄積によってのみそれを拡大することができる。」（『資本論』新書版④一〇一五〜一〇一六ページ、上製版I b一〇一二ページ）

### 【資料18】生産力の発展と消費の狭い基盤との衝突

「この剰余価値の獲得は直接的生産過程を形成するものであり、この過程には…：…なんの制限もない。しぼり出されうる分量の剰余労働が諸商品に対象化されていけば、それで剰余価値は生産されている。しかし、この剰余価値生産によつては、資本主義的生産過程の第一幕である直接的生産過程が終わっているだけである。資本はこれこれの量の不払い労働を吸収した。…：…そこで、過程の第二幕が始まる。総商品分量、総生産物が——不変資本および可変資本を補填する部分も、剰余価値を表わす部分も——販売されなければならない。それが販売されないか、または一部分しか販売されないか、または生産価格以下の価格でしか販売されないならば、確かに労働者は搾取されているが、しかし彼の搾取は資本家にとつては搾取として実現されないものであり、しぼり取られた剰余価値がまったく実現されないか、または部分的にしか実現されないかであり、それどころか彼の資本の一部分または全部の失とさえ結びつきうる。直接の搾取の諸条件とこの搾取の実現の諸条件とは、同じではない。それらは時間と場所だけではなく、概念的にも異なっている。一方「直接の搾取の諸条件」は社会の生産力によって制限されているだけであり、他方「搾取の実現の諸条件」は、いろいろな生産部門のあいだの比例関係と社会の消費力とによって、制限されている。しかし、ここで社会の消費力というのは、絶対的な生産力によって規定されているのでもなければ、絶対的な消費力によって規定されているのでもなく、敵対的な分配諸関係——社会の大衆の消費を、多かれ少なかれ狭い限界でしか変化できない最低限に引き下げるといふ分配諸関係——を基盤とする消費力によって規定されているものである。社会の消費力は、さ



らに、蓄積への衝動によって、すなわち、いつそう拡大する規模で資本を大きくし剰余価値を生産しようという衝動によって、制限されている。これは、資本主義的生産にとっての法則——生産方法そのものにおけるたえざる革命、それによってひきおこされる現存資本の不断の減価、全般的な競争戦、生産の改良と生産規模の拡大の必要性などによって課せられている法則である。生産の改良と生産規模の拡大は、資本がただ自己を維持し、没落の罰を受けないためだけにも要求される。したがって、市場はつねに拡張されなければならず、その結果、市場を規制する諸連関および諸条件は、ますます、生産者から独立してはたらく一つの自然法則という姿をとるようになり、ますます制御不能なものとなってくる。内的な矛盾は、生産の外的な分野の拡張によって、その解決をはかろうとする。しかし、生産力が発展すればするほど、それは、消費の諸条件が立脚している狭い基盤とますます衝突するようになる。この矛盾に満ちた基盤の上では、資本の過剰が相対的過剰人口の増大と結びついているのは、決して矛盾ではない。というのは、両者が合体されれば、生産される剰余価値の総量は増大するではあるが、まさにそれとともに、この剰余価値が生産される諸条件と、この剰余価値が実現される諸条件とのあいだの矛盾は増大するからである。」（『資本論』第三部、第一章「この法則の内的諸矛盾の展開」、新書版⑨四一五〜四一七ページ、上製版Ⅲ a 四一二〜四一四ページ）

【資料19】資本主義的生産の真の制限は資本そのものである

「資本主義的生産の真の制限は、資本そのものである。というのは、資本とその自己増殖とが、生産の出発点および終結点として、生産の動機および目的として、現われる、ということである。そして、生産はただ資本のためのものであって、その逆ではないということ、生産諸手段は生産者たちの社会の生活条件をたえず拡大するためのたんなる手段ではない、ということである。生産者大衆の収奪と貧困化にもとづく資本価値の維持と増殖が、その内部でのみ運動ができる諸制限——このような諸制限は、それゆえ、資本が自分の目的を達成するために使用せざるをえない生産諸方法とたえず衝突することになる。そして、この生産諸方法とは、生産の無制限的な拡張に向かつて、自己目的としての生産に向かつて、労働の社会的生産諸力の無条件的な発展に向かつて、突進するものである。手段——社会的労働の生産諸力の無条件的な発展——は、現存資本の増殖という限られた目的とは、たえず衝突することになる。それゆえ、資本主義的生産様式が、物質的生産力を発展させ、かつこの生産力に照応する世界市場をつくり出すための歴史的な手段であるとすれば、この資本主義的生産様式は同時に、この生産様式のこのような歴史的任務と、この生産様式に照応する社会的生産諸関係とのあいだの恒常的矛盾なのである。」（『資本論』第三部、⑨四二六〜四二七ページ、上製版Ⅲ a 四二三ページ）

## 五、マルクスの未来社会論

### 【資料20】「否定の否定」による個人的所有の再建

「資本主義的生産様式から生まれる資本主義的取得様式は、それゆえ資本主義的な私的所有は、自分の労働にもとづく個人的私的所有の最初の否定である。しかし、資本主義的生産は、自然過程の必然性をもってそれ自身の否定を生み出す。これは否定の否定である。この否定〔資本主義的私的所有の否定〕は、私的所有を再建するわけではないが、しかし、資本主義時代の成果――すなわち、協業と、土地の共有ならびにその労働そのものによって生産された生産手段の共有――を基礎とする個人的所有を再建する」（『資本論』新書版④一三〇六ページ、上製版I b 一三〇一ページ）

	生産手段	生活手段
小経営	生産者個人による私的所有（「自分の労働にもとづく個人的私的所有」）	生産者による個人的所有
資本主義	非生産者（＝資本家）による私的所有（「他人の労働の搾取にもとづく資本主義的な私的所有」）	「生産者（＝労働者）による個人的所有」は否定される
未来社会	「結合した生産者」による社会的所有	「生産者による個人的所有」の再建

※不破哲三『『資本論』全三部を読む』第三冊、二五七～二五八ページ参照

### 【資料21】未来社会における生産手段と生活手段

「最後に、目先を変えるために、共同的生産手段で労働し自分たちの多くの個人的労働力を自覚的に一つの社会的労働力として支出する自由な人々の連合体「アソツィアツィオン」を考えてみよう。ここでは、ロビンソンの労働のすべての規定が再現されるが、ただし、個人的にはなく社会的に、である。ロビンソンのすべての生産物は、もっぱら彼自身の生産物であり、それゆえまた、直接的に彼にとつての使用価値でもあった。この連合体の総生産物は一つの社会的生産物である。この生産物の一部分は、ふたたび生産手段として役立つ。この部分は依然として社会的なものである。しかし、もう一つの部分は、生活手段として、連合体の成員によって消費される。この部分は、だから、彼らのあいだで分配されなければならない。この分配の仕方は、社会的生産有機体そのものの特殊な種類と、これに照応する生産者たちの歴史的発展程度とに応じて、変化するであろう。」（『資本論』新書版①一三三ページ、上製版I a 一三三ページ）

【資料22】『共産党宣言』での社会変革の目標の定式化

「共産主義の特徴は、所有一般の廃止でなくて、ブルジョアの所有の廃止である。

しかし、近代的なブルジョアの私的所有は、階級対立に、他人による人の搾取にもとづいた、生産物の生産及び取得の、最後の、かつもっとも完成した表現である。

この意味で、共産主義者は、自分の理論を一つの表現で総括することができる——私的所有の廃止。」（マルクス、エンゲルス『共産党宣言』一八四八年、古典選書シリーズ『共産党宣言／共産主義の諸原理』新日本出版社、七三ページ）

【資料23】『資本論』のなかでの未来社会の特徴づけ

- (1) 「共同的生産手段で労働し自分たちの多くの個人的労働力を自覚的に一つの社会的労働力として支出する自由な人々の連合体」（第一部第一篇「第一章 商品」①一三三ページ、上製版I a一三三ページ）
- (2) 「社会的生活過程の、すなわち物質的生産過程の姿態は、……自由に社会化された人間の産物として彼らの意識的計画的な管理のもとにおかれる」（同前、①一三五ページ、I a一三五ページ）
- (3) 「社会的生産過程の……意識的な社会的な管理および規制」（第一部第四篇「第二章 分業とマニファクトゥア」③六一八ページ、I b六一六ページ）
- (4) 「共産主義社会」（第一部第四篇「第一章 機械と大工業」③六八一ページ、I b六七九ページ）
- (5) 「各個人の完全で自由な発展を基本原理とする、より高度な社会形態」（第一部第七篇「第二章 剰余価値の資本への転化」④一〇一六ページ、I b一〇二二ページ）
- (6) 「現存の生産手段および労働力によって直接的かつ計画的に実現されうるいっそう合理的な結合」（同前、④一〇四七ページ、I b一〇四三ページ）
- (7) 「この否定〔資本主義的私的所有の否定〕は、……資本主義時代の成果、すなわち、協業と、土地の共有ならびに労働そのものによって生産された生産手段の共有を基礎とする個人的所有を再建する」（第一部第七篇「第二章 いわゆる本源的蓄積」④一三〇六ページ、I b一三〇一ページ）
- (8) 「共同的生産」（第二部第一篇「第六章 流通費」⑤二二一ページ、II二二四ページ）
- (9) 「共産主義社会」（第二部第二篇「第六章 可変資本の回転」⑥四九七ページ、II五〇二ページ）
- (10) 「社会的〔社会化された〕生産」（第二部第三篇「第十八章 緒論」⑦五六六ページ、II五七一ページ）
- (11) 「労働者たちが自分自身の勘定で労働する社会状態」（第三部第一篇「第五章 不変資本の使用における節約」⑧一四二ページ、III a一四三ページ）
- (12) 「人間社会の意識的な再構成」（同前、⑧一五〇ページ、III a一五一ページ）
- (13) 「生産が社会のまえもつての現実の管理のもとにある」社会（第三部第二篇「第一〇章 競争による一般的利潤率の均等化。……」⑨三二二ページ、III a三二七ページ）
- (14) 「生産者たちが自分たちの生産をまえもつて作成した計画に従って規制する社会」（第三部第三篇「第五章 この法則の内的諸矛盾の展開」⑨四四五ページ、III a四四二～四四三ページ）
- (15) 「資本〔生産手段のこと——引用者〕が生産者たちの所有に、ただし、もはや個々ばらばらな生産者たちの私的所有としての所有ではなく、結合した生産者である彼らの所有とし

ての、直接的な社会的所有としての所有に」転化する。これとともに、「これまではまだ資本所有と結びついていた再生産過程上のすべての機能が、結合した生産者たちの単なる諸機能に、社会的諸機能に、転化する」(第三部第五篇「第二十七章 資本主義的生産における信用の役割」⑩七五八ページ、III a 七五八ページ)

(16) 「結合的生産様式」(同前、⑩七六四ページ、III a 七六四ページ)

(17) 「結合した労働の生産様式」(第三部第五篇「第三十六章 資本主義以前(の状態)」⑪一〇六四ページ、III b 一〇六九ページ)

(18) 「社会の資本主義的形態が止揚されて、社会が意識的かつ計画的な結合体(アソツィアツィオン)」として組織される」(第三部第六篇「第三十九章 差額地代I」⑫一一六一ページ、III b 一六七ページ)

(19) 「より高度の経済的社会構成体」(第三部第六篇「第四十六章 建築地地代。……」⑬一三五二ページ、III b 一三五七ページ)

(20) 「社会化された人間、結合した生産者たちが、自分たちと自然との物質代謝」を「合理的に規制し、自分たちの共同の管理のもとにおく」社会(第三部第七篇「第四十八章 三位一体的定式」⑬一四三五ページ、III b 一四四一ページ)

(不破哲三『古典研究 マルクス未来社会論』新日本出版社、一六九〜一七一ページ)

#### 【資料24】各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件である連合体

「階級および階級対立をもつ古いブルジョア的社会的代わりに、各人の自由な発展が、万人の自由な発展のための条件である連合体(アソツィアツィオン)が現われる。」(マルクス、エングルス『共産党宣言』一八四八年、古典選書シリーズ『共産党宣言／共産主義の諸原理』新日本出版社、八六ページ)

#### 【資料25】「自由の国」と「必然性の国」

「(イ) 自由の国は、事実、窮迫と外的な目的への適合性によって規定される労働が存在しなくなるところで、はじめて始まる。したがってそれは、当然に、本来の物質的生産の領域の彼岸にある。

(ロ) 未開人が、自分の諸欲求を満たすために、自分の生活を維持し再生産するために、自然と格闘しなければならないように、文明人もそうしなければならない、しかも、すべての社会諸形態において、ありうべきすべての生産諸様式のもので、彼(人)は、そうした格闘をしなければならない。彼の発達とともに、諸欲求が拡大するため、自然的必然性のこの国が拡大する。しかし同時に、この諸欲求を満たす生産諸力も拡大する。

(ハ) この領域における自由は、ただ、社会化された人間、結合した生産者たちが、自分たちと自然との物質代謝によって——盲目的な支配力としてのそれによって——支配されるのではなく、この自然との物質代謝を合理的に規制し、自分たちの共同の管理のもとにおくこと、すなわち、最小の力の支出で、みずからの人間性にもっともふさわしい、もっとも適合した諸条件のもとでこの物質代謝を行なうこと、この点にだけありうる。しかしそれでも、これはまだ依然として必然性の国である。

(ニ) この国の彼岸において、それ自体が目的であるとされる人間の力の発達が、真の自由の国が——といっても、それはただ、自己の基礎としての右の必然性の国の上のみ開花しうるのであるが——始まる。労働日の短縮が根本条件である。」(『資本論』新書版⑬一四三四〜一四三五ページ、上製版III b 一四四〇〜一四四一ページ。(イ)〜(ニ)の区分は引用者による)

## 日本共産党と科学的社会主義

### 1957年 第七回党大会

「五〇年問題」を自主的に総括し、自主独立の立場を確立。同時に、武装闘争論の誤りも明らかに。（『日本共産党の八十年』一二七〜一二八ページ）

### 1961年 第八回党大会

綱領路線を確立。①日本の政治や社会のどんな変革も「国会で安定した過半数」をえて実現することをめざすとし、武装闘争方針や強力革命論を明確に退けることを綱領上明らかに。②資本主義の枠内での民主的変革の方針。③社会の段階的発展の見地をつらぬいたこと。④政府の問題でも、民主的な変革を全面的にやりとげる政府にいたる過程でも、さまざまな形の政府をつくることがありうるのと立場を明らかにするとともに、社会発展のすべての過程で統一戦線と連合政権に依拠することを一貫した方針とした。（『八十年』一五九〜一六〇ページ）

### 1960年代

アメリカの世界戦略を具体的に分析し、「各個撃破政策」と特徴づける。  
ソ連共産党、中国共産党毛沢東派の干渉とのたたかい。

### 1967年 論文「極左日和見主義者の中傷と挑発」

レーニン『国家と革命』の言説を絶対化して、議会活動の否定、中国式「人民戦争」論を押しつける議論を批判。マルクスらしいの科学的社会主義の理論と運動のなかに、民主的議会をかちとり、そのもとで「議会の多数を得ての革命」をすすめる方針が一貫して流れていることを明らかにした。（『八十年』一九三ページ）

### 1968年 ソ連などのチエコスロヴァキア侵略

民族自決権の擁護が科学的社会主義の原則であることを解明し、ソ連などの行為はそれをふみにじる決定的な誤りであることを批判。同時に、この事件をきっかけに、社会主義のもとでの民主主義のあり方について探求を本格的に開始。一九六九年三月、社会主義政権においても、反対政党をふくむ複数政党制をとることを明らかにした。（『八十年』一九七ページ）

### 1970年 第一一回党大会

「進んだ資本主義国の革命」は「新しい、人類の偉大な摸索と実践の分野」であり「新しい複雑性とともに新しい可能性」があることを強調。複数政党制、選挙の結果による政権交代制をとることなど、いつそう明確に。（『八十年』一九七ページ）

1974年10月 未来社会において党と国家は明確に区別され、科学的社会主義を「国定の哲学」にすることはしないという見解を発表。

1975年12月 第七回中央委員会総会（第一二回党大会）決議「宗教についての日本共産党の見解と態度」

### 1976年 第一三回臨時党大会

「自由と民主主義の宣言」を採択。自由と民主主義の全面的で本格的な発展こそが、マルクス、エンゲルス以来の本来の科学的社会主義の立場であることを解明。そのなかで、社会主義の未来において、市場経済を活用する立場を明らかにする。同時に、この大会で、科学的社会主義の呼称問題について、「マルクス・レーニン主義」の呼称をやめ科学的社会主義とすることを決める。

### 1980年 第一五回党大会

発達した資本主義が社会主義にひきつぐべき歴史的遺産として、マルクスが高度の物質的生産力とともに人間の「個性」の発展の諸条件をあげたことを解明。

#### 1985年 第一七回党大会

綱領を一部改正し、「覇権主義の克服」を綱領上の課題として明記するとともに、「資本主義の全般的危機」という誤った規定を削除。

1991年 ソ連共産党の解散にたいして、「大国主義・覇権主義の歴史的巨悪の党の終焉を歓迎する」との常幹声明を発表

同12月、常幹声明で、科学的社会主義の運動として自主的に発展するためには、①覇権主義とそれへの追従のあらゆる傾向を根本的に清算すること、②「共産主義・社会主義崩壊」論の誤りに反対すること、③科学的社会主義の学説を生きた指針として社会の法則的な発展を促進する立場をつらぬくこと、という「三つの基準」を提起。

#### 1994年 第二〇回党大会

綱領を一部改定し、スターリン以後の旧ソ連社会が、社会主義社会でも、それへの過渡期の社会でもなかったというところに、党の認識の到達点があることを示した。（『八十年』二八七ページ）

### この間の日本共産党の理論的探究について

1996～1997年 不破哲三『エンゲルスと「資本論」』の連載・刊行

1997～2001年 不破哲三『レーニンと「資本論」』の連載・刊行

1999年

7月 不破委員長、党創立七七周年記念講演「現代史のなかで日本共産党を考える」のなかで、「科学的社会主義をどういう立場でとらえ、発展させるか」、レーニンの理論の「全面的な再吟味」を提起。

2000年

1月 新春インタビュー「世紀の転換点に立って——日本共産党の理論的な立場」（『世紀の転換点に立って』に収録）

11月 第二二回党大会で党規約改定

2001年

1月 新春インタビュー「二一世紀を展望して——国際交流のなかで、日本共産党の政策と理論を見る」、インタビュー「一九一七年・「国家と革命」をめぐる」（『世紀の転換点に立って』に収録）

不破議長が中央党学校で講義（『科学的社会主義を学ぶ』『日本共産党綱領を読む』として刊行）

11月 赤旗まつり講演「二一世紀と『科学の目』」（同名単行本に収録）

2002年

1月 新春インタビュー「二一世紀はどんな時代になるか」（『二一世紀はどんな時代になるか』に収録）

1～12月 党本部で不破議長を講師に「代々木『資本論』ゼミナール」を開催（その後『「資本論」全三部を読む』として刊行）

1～10月 『経済』誌上で「マルクスと『資本論』——再生産論と恐慌」を連載（二〇〇三年に同名単行本として刊行）

2月 東京「青年のつどい」で講演「二一世紀を、志をもって生きよう」（『二一世紀はどんな

- な時代になるか』に収録)
- 4月 広島と大阪で講演「二一世紀に『資本論』を読む」(『二つの世紀と日本共産党』に収録)
- 5月 講演「激動の世紀の出発点に立って」(同前)
- 8月 不破議長が中国を訪問、学術講演「レーニンと市場経済」(『北京の五日間』、『資本論』全三部を読む)第一冊に収録)
- 11月 赤旗まつり講演「ふたたび『科学の目』を語る——二一世紀の資本主義と社会主義」(同名単行本に収録)
- 2003年
- 6月 第七回中央委員会総会、綱領改定案を提案。
- 8月 党本部の学習会で講義「『ゴータ綱領批判』の読み方」(『古典研究 マルクス未来社会論』に収録)
- 2004年
- 1月 第二三回党大会、新しい綱領を決定。
- 2月 全国都道府県学習・教育部長会議で講義。その一部を整理して「『資本論』のなかの未来社会論——綱領の諸規定の原理的な根拠を探る」として発表(『古典研究 マルクス未来社会論』に収録)
- 民青同盟全国大会で講演「新しい世紀と新しい綱領」(『報告集 日本共産党綱領』に収録)
- 3月 中央党学校で綱領講義(一二月に『新・日本共産党綱領を読む』として刊行)
- 7月 『レーニンと『資本論』』からレーニンの革命論の問題点を検討した二つの章をとりだし、『古典研究 議会の多数を得ての革命』として刊行
- 10、11月 仙台、東京で『資本論』について講演(『二一世紀・『資本論』のすすめ』として、『前衛』二〇〇五年二、三月号に掲載)
- 2005年
- 2月 党綱領幹部学習会で講義「党綱領の理論上の突破点について」(同名単行本として刊行)
- 4月 日本アジア・アフリカ・ラテンアメリカ連帯委員会主催の集会で講演「アジア・アフリカ・ラテンアメリカ——いまこの世界をどう見るか」(同名単行本として刊行)
- 5月 京都大学の新生歓迎講演会で「これからの時代と世界のこと、学問のこと」と題して講演(民青同盟から同名のパンフレットとして刊行、『日本の前途を考える』に収録)
- 12月 中国共産党代表団が来日、四日間にわたって理論交流(『二一世紀の世界と社会主義』として刊行)
- 2006年
- 5月 中国共産党との理論交流で訪中、中国社会科学院で学術講演「マルクス主義と二一世紀の世界」(『「科学の目」講座 いま世界がおもしろい』所収)
- 『月刊学習』誌上で、講座「古典への招待」の連載始まる(現在も連載中)。
- 8月 特別党学校で党史の講義(十一月、『日本共産党史を語る』上下、として刊行)
- 10月 中国社会科学院マルクス主義研究院と理論交流。その冒頭で「科学的社会主義の学説の研究方法について」を発言(『いま世界がおもしろい』所収)
- 11月 赤旗まつり「科学の目」講座で講演「いま世界がおもしろい」(同前)
- 12月 党本部で科学的社会主義研究講座「フオイエルバッハ論」を開催。

マルクス、エンゲルス関連年表

18世紀			1776 アメリカ独立宣言 1772 ワット、複動式蒸気機関 1789 フランス革命、「人権宣言」
	1818 マルクス生まれる 1820 エンゲルス生まれる		1810年代 イギリスでラダイト運動（機械打ち壊し）
	1844 マルクスとエンゲルス、理論上の一致を確認 1848 『共産党宣言』	1847 共産主義者同盟第1回大会	1831 仏・リオンで最初の労働者蜂起 1834～42 英・チャーティスト運動 1848～49 ヨーロッパ革命
	1859 マルクス『経済学批判 第1分冊』		
19世紀	1867 マルクス『資本論』第1部（初版） 1872 マルクス『資本論』第1部（第2版） 同フランス語版（～75） 1875 マルクス「ゴータ綱領批判」 1877 エンゲルス『反デューリング論』 1880 エンゲルス『空想から科学へ』 1883 マルクス死す 1885 エンゲルス編集で『資本論』第2部刊行	1864 国際労働者協会（第1インタナショナル） 創立。マルクスが創立宣言、規約を起草  1875 ドイツ社会主義労働党結成	1868 日本、明治維新 1871 パリ・コミューン
	1894 エンゲルス編集で『資本論』第3部刊行 1895 エンゲルス死す	1889 第2インタナショナル創立	



年表 科学的社会主義の3つの源泉とマルクス、エンゲルス

17世紀	<p><b>古典派経済学</b></p> <p>ペティ (1623~1687) ケネー (1694~1774)</p>		1640 イギリス市民革命	
18世紀	<p>スミス (1723~1790)</p> <p>リカードウ (1772~1823) 1776 スミス『国富論』</p>	<p><b>空想的社会主義</b></p> <p>サン・シモン (1760~1825) オウエン (1771~1858) フーリエ (1772~1837)</p>	<p><b>ドイツ古典哲学</b></p> <p>カント (1724~1804) ヘーゲル (1770~1831)</p>	<p>1776 アメリカ独立 1782 ワット、複動式蒸気機関 1789 フランス革命</p>
19世紀	<p>1817 リカードウ『経済学および課税の原理』</p>	<p>1802 サン・シモン『ジュネーブの一住民の手紙』 1808 フーリエ『四運動の理論』 1817 オウエン、共産主義村の「計画」を発表</p> <p>マルクス (1818~1883) エンゲルス (1820~1895)</p> <p>1848 『共産党宣言』</p> <p>1867 『資本論』第1部</p>	<p>フォイエルバッハ (1804~1872)</p> <p>1821 ヘーゲル『法の哲学』</p> <p>1841 フォイエルバッハ『キリスト教の本質』</p>	<p>1831 仏・リヨンで最初の労働者蜂起 1838~42 英・チャーティスト運動 1848~49 ヨーロッパ革命</p> <p>1871 パリ・コミューン</p>